

その昔、たいへんな戦争があり、私たちはその戦後を生きておりました。ところが近頃、ふと気がつくともしかしたら「戦前」と感じるような時代へ急激に移り変わってきてしまいました。現代日本に何が起こり、いったい私たちはどこへ行くのでしょうか。

本書を讀んでいただくと、その謎の一端が解けます。ここで扱う歴史の記憶たちは、戦争をめぐることごとく未解決案件が重なり、戦争への終止符を打とうとされないまま現在に至っていると教えてくれます。世界史上、特筆されるファシズム時代の案件に片を付けていないなんて、日本はとても忘れていたのでしょいか。むしろ逆に、ひたすら高度経済成長を求め、だからこそさらに米国に追随し、その戦後とされる時代そのものが入り組んだゆえに、解決から遠ざかっていった様子が、どの論考からも読み取れるかと思えます。

歴史がどのように位置づけられ理解されてきたか、あるいは無視されてきたかを扱う記憶研究では、過去の認識と現在の政治形成との関係に注目します。特定の歴史の記憶をどのようにとどめるか、あるいは再構築されるかが、国家にとっての政治的判断の視点となるからです。記憶をめぐる論争は事実以上に「視点の論争」でもあると言われる所以です。

本書ではそれぞれの章で、戦後日本で、国家が戦争における日本軍の行為を過小評価したり、責任を曖昧にしたり、影の部分に言及するのを避けたこと、それら歴史の解釈を国の記憶に埋め込もうとしてきたことが次々と明かされます。ほかに、アメリカとの関係に関心は奪われ、日本がアジアの隣国と日本国民に与えた危害についての記憶は限りなく薄いことが示されます。結果、どの分析からみても日本は国家の過去の問題と真っ向から取り組んでいないという事実が浮かび上がってきてしまうのです。つまり公的な記憶の政治がまったく変化していないことになります。むしろ過去の問題を問題とせず、ていねいに反省もしないので、過去のメンタリテイが亡霊のようにまた立ち上がってきているようにさえ見受けられます。それだから、戦後だったはずの時空間が戦前なるものへとタイムスリップし、社会の趣きが暗く変えられてゆくように思われます。

本書の流れに沿っていえば、戦後日本は、憲法9条で戦争永久放棄を宣言したにもかかわらず、沖縄では米軍を駐留させ続け、東京裁判の汚名を払拭すべく国際社会の一員として認められようと国際刑事裁判所（ICC）に加盟しましたが、アジアに対する戦争犯罪については対応を拒んできました。国の復興のために政治的経験者が必要だったことから、戦間期の政策に深くかかわっていた政治家が返り咲き、その意志を継いだ者が現在の首相として、政治を急進的に動かしているように見えます。特攻隊員を扱う章では、彼らの「潔さ」がステレオタイプに語り継がれてきましたが、一人ひとりの若者が想像を絶する動揺や疑い、喪失感の中で、愛する家族やふるさとを守るには自分が征かざるを得ないと考えた点を実証しています。

戦後の日本はファシズム国家の汚名を挽回し、豊かな暮らしをとひたすら経済成長に突っ走ってきました。しかし、海外でも注目され日本が本当に誇れるものは、紛れも無く世界でも珍しい平和憲法でしょう。ところが現在の日本は、その日本が誇れるものを捨て去ろうとしています。1930年代に日本は、欧米の列強諸国

の中で経済力を高めるために軍事力を高め、遂に戦争に突入しましたが、その繰り返しが起こっています。

多くの国民の思いと異なり、2015年9月には安全保障関連法が強行採決され、改憲に向けて、国会会派の数の論理ばかりが話題になります。未解決の「戦争への終止符」のための議論は、きちんと論じ合われず吟味されないまま、人びとが考え合う余裕や関係は奪われています。動揺し、疑い、喪失感さえ感じる私たちは、さまざまな感情の果てに現代を生きる特攻隊員のような立場に在るのかもしれませんが。

もしそうだとしたら、私たちは今からもう一度始めたいと思います。未解決の公的な記憶を連れ出し、その不備を暴き、国民で共有すること。それは、戦争への終止符を打つ大事なプロセスのひとつです。この国に生きる若い世代や未来に向けて、記憶を正當に洗練させ時代を新しくするという希望を再発見したいと考えます。イギリスのフックさん、ドイツのルクナーさんから論考を通して、現在の日本にこの上なく温かいエールをいただきました。そのお二人の論考をわかりやすく翻訳してくださったのは、第4章担当でスイス在住の石川さんです。彼女の特攻の分析は、体力と知力を注ぎ込んでなされたとてもユニークなものです。法律文化社の掛川直之さんは研究者でもあり、賢い同伴者で居てくださいました。このチームで本書をまとめあげることができ、ただ感謝です。

戦争への終止符を打つために、ますます皆さんと知恵を分かちもちたい、私たちはそれぞれの場所ですいつも願っています。平安。

2016年4月11日 芽吹く季節に

編者を代表して 桜井智恵子